

学生の自発的研修活動に関する基礎的調査 (1)

南浦 涼介・岸本憲一良・岡村 吉永

Basic Research on Student-Initiated Teaching Profession Training Activities I

MINAMIURA Ryosuke, KISHIMOTO Kenichiroh, OKAMURA Yoshihisa

(Received January 10, 2012)

キーワード：自発的活動、社会的マイノリティ、相互作用、ヒューマンライブラリー

はじめに

教育学部における新たな教員養成の像を描く際の1つとして山口大学で行われてきているものに、学生の「自発的活動」がある。自らが教育的活動を立案・計画し、実行していく中で、学生自身の自律能力を高めようとする試みである。本学において、この「自発的活動」はさまざまに行われている。例えば、「ちゃぶ台チューター」などは教育学部学生を対象にした地域の小学校の支援活動である。2011年現在、学生の自発的活動により、いくつかの小学校で、正課あるいは放課後の時間などに子どもたちの学習支援や生活支援が行われている。また、その他にも、小学校教育専門コースでは、地域の小学校や公民館で「クリスマス会」を子どもたち対象に開き、学生自身で内容の構成・計画、実行を行なっているなど、自発的活動は盛んになりつつある。

学生の「自発的活動」は、社会の変動に起因するさまざまな事象に適切に対応しなければならない現代の教員に求められる資質能力を学部の段階で向上させるために有効な手段となりうる。現在のところ、この自発的活動は「小学校段階の子どもたちの教育的支援」という方向で活動が行われている。この種の活動は、教員を目指す学生たちにとって、明確な子ども像を持って大学の専門教育に対することができ、また、地域や学校とのコミュニケーションを通じた協働能力を身につけることができる。あるいは学校側にとっても、教員の目の届きにくい個に対応したきめ細やかな支援を期待することができるという点で実りの多いものである。

しかし、こうした方向の活動は上記のような点に多くの意義を持つことを認めながらも、反面いくつかのジレンマというべき課題も散見される。

1つは、活動が「学校」という場の「子ども」という人の世界に限定されすぎてしまうことである。教員を目指す学生たちであるから、活動の場となる対象が学校やそこでの子どもたちの教育に焦点が当たるのは当然である。しかし、教員の専門性は学校や子どもたちを対象にしたものばかりで育成されるわけではない。広く人間の成長を見取る必要がある教職である。学生の段階で学校や子どもに焦点をおいたものばかりの活動になれば、ともすると、小学校段階の範囲内でのみ人間を理解してしまい、それ以後の社会における人間のありようが視野に入らず、広い視野を見据えた教育活動がなされにくい土壌を形成してしまう恐れがある。

2つめに、教職を希望する学生たちにとって、「子ども」に対するステレオタイプなイメージが保持されたまま、学校現場や子どもたちに対する活動が展開されてしまうことである。当然であるが、子どもは1様ではない。ましてその多様な子どもたちが成長し、大人になればなるほどにその多様性は複雑さを増す。

「子どもたちは素直である」「子どもたちは〇〇が好きだ」といったポジティブなイメージを学生たちは持っている。また逆に「学習についていけない子どもがいるからその支援が大切である」「発言に自信を持っていない子どもたちがいるから、教師は肯定的に子どもたちの発言を認める土壌を作らなければならない」というネガティブな子どもたちのイメージから引き出される教師の役割像も学生たちは早い段階から持ってい

る。しかしこれだけでは、社会に流れる情報から子どもを一面的に理解し、これまたステレオタイプな教師の役割像を持ったに過ぎず、多様な子どもたちの背景や葛藤を理解し、教師としての適切な対応をすることには遠い。

3つめにあげられるのは、これらの活動が「学生＝支援する側」「子ども＝支援される側」という構図を生みがちな点である。子どもたちの理解やその支援に当たる自身のあり方を見つめ直す機会はもちろん十分あるが、「支援する／される」という構図があるかぎり、教職を志す既存の価値観で限定されてしまい、学生自身の社会に対する価値観に根本的に疑問を呈したり、自己のあり方の変容を促したりするものになりにくい側面もある。

このようなことを考慮して、これまでの学校現場や子どもたちを念頭においた「自発的活動」ではない、学生の社会的価値観や自己のあり方の変容を可能にし、より幅広い視点から教職を見つめることを可能にする新たな「自発的活動」の可能性を検討していきたい。

そのために、本稿では近年都市部で試みはじめられた「ヒューマンライブラリー」(human library)という活動に焦点を当てる。その中で本稿では、駒澤大学文学部社会学科の坪井健ゼミで2010年に行われたヒューマンライブラリーである「生きている図書館」(2010年10月10日開催)の活動に着目した。1つにはこの活動はゼミ生たちによって非常に詳細な活動報告書が発刊されていること(駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室、2011)、また2つには坪井ゼミで行われているこの活動は、学生の学部3年生次のゼミ活動の一貫として学生が自身で「本」となる語り手を探し、その上で主催するという形をとっていることである。前者は筆者らの調査にとって非常に有益になることはもちろんであるが、より積極的には後者が「教員養成における学生の自発的活動」のあり方を探る筆者らにとって参考になるものであった。本稿では、そうした理由から、駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室(2011)の報告書と、併せて行った坪井健氏への聞き取り調査(2011年12月26日実施)を基にして、そこから教育学部学生に対する「自発的活動」のあり方を考察してみたい。

1. 他大学におけるヒューマンライブラリー活動の概要

1-1 ヒューマンライブラリーの概要

ヒューマンライブラリー(リビングライブラリーという名称も使われているが、現在リビングライブラリーからヒューマンライブラリーへと変化しつつあるようである)とは、2000年にデンマークで始まったイベントである。その後急速に世界に広がり、ヨーロッパ・アジアを問わず現在までに40以上の国で開催されている。日本で最初に紹介があったのは、2008年6月28日の朝日新聞の朝刊であり、そこから注目が集められた。

ヒューマンライブラリー日本事務局は、ウェブサイトの冒頭でヒューマンライブラリーを次のように説明している。

「Human Library」(以下 ヒューマンライブラリー)では、障害のある人やホームレス、セクシャルマイノリティなど、誤解や偏見を受けやすい人々を、「生きている本」として貸し出します。読み手は普段あまり触れ合うことのできない本を借りることで、その語り部である当事者から直接話を聞くことができ、自分の持っている固定観念に気づき、新たな視点を獲得の機会となります。そして、「生きている本」と読者との対話を通して、多様化に対して開かれた社会の実現を目指す試みです。

(ヒューマンライブラリー日本事務局、n. d)

ヒューマンライブラリーは人と人のコミュニケーションを「図書館」による「本の貸借」という形態を取ることによって、従来の講演会やインタビューとは異なるものになっている。

第1に、語り手・読者双方に気づきをもたらしやすい作用を持つことである。このように、人間が「生きている本」という形で語り手となり、「読者」となった聞き手に対して個人的な体験や抱える葛藤を話すという形をとる。講演会のような一対多数の形ではなく、一対一あるいは一対三人程度の形態を取ることによって、語り手の一方的な語りでもなく、読み手の一方的な解釈でもない、双方向的な作用を生み出す。これによって、読者となった聞き手は、普段接することのなかなかできない疑問や世界を知ることができると

ともに、自身の疑問などを聞くことも可能になる。また、「本」である語り手の側にも、自身にもまた存在する偏見や、自己と他者の間にあった壁を発見できるなど、さまざまな気づきをもたらす。

第2に、「司書」という役割を主催者が受け持ったため、「本」と「読者」の関係に一定のルールを創ることができ、「本」と「読者」の円滑な対話を進めることを可能にしている点である。主催者は「司書」として、「読者」に対する「本」を貸し出すにあたって、「『本』を傷つけないこと」などといった一定のルールを設け、未知の人間同士の対話を心地よく進行できるようにしている。

1-2 駒沢大学における「生きている図書館」活動

1-2-1 「生きている図書館」活動の概要

日本においてヒューマンライブラリーの活動は近年少しずつ行われてきている。

「生きている図書館」活動は、社会心理学や異文化間教育学を専門にする坪井ゼミで行われることもあり、そのテーマは「世の中に生きづらさを感じているマイノリティ」に焦点を当てて「本」の選定がなされている。最終的に決まった「生きている図書館」の「本」の成り手のカテゴリーは以下のとおりである。

表1 「生きている図書館」における「本」のカテゴリー

「監獄」人権NPOスタッフ 自死者遺族 筋ジストロフィー当事者 ユニークフェイスメンバー バイジェンダー当事者 犯罪被害者家族 難民支援NGO職員 GID (MtX-TG) 当事者 (Xジェンダー) トランスジェンダー当事者 生活保護受給者 ホームレス経験者 パラサイトシングル当事者 言語障害者 摂食障害者自助グループメンバー 薬物依存回復途上者 難治性脱毛症当事者 アルコール依存回復途上者 視覚障害者 アルビノ当事者

(駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室、2011:22)

この上のようなカテゴリーの話し手が「本」となり、自らの「物語」にタイトルをつけ、「読者」に語る内容をつくっている。幾つかの「本」のタイトルとあらすじを紹介したものが、表2である。

表2 「生きている図書館」における「本」のタイトルとあらすじ（一部）

カテゴリー	タイトル	あらすじ（本人談）
薬物依存症回復途上者	辞められないもの、私の依存	薬物との出会い、それは特定の人だけにあってはならない。日常の中で出会って、薬物中心の生活に変わってしまった後、薬物をやめていく物語。
難治性脱毛症	体は痛くないけど、心が痛い！ ～全身の毛がない難治性脱毛症当事者の苦悩と現状～	ある日突然、髪の毛が抜け始め、あっという間に頭全体に脱毛が広がり、眉毛も睫毛も鼻毛も体毛もすべての毛が抜けてしまう病気があるのをご存知ですか？ メディアでは、カツラや髪を生やすためのCMが頻りに流れていますが、その裏側で、傷つき、悲しい思いをしている人がたくさんいます。これまで、社会の偏見が怖くて言えなかった脱毛症当事者の苦悩を、勇気を出して語りしたいと思います。
視覚障害者	「三力」（みりょく）とともに～歩き続ける太鼓打ちの思い～	10歳での失明、盲学校での生活、上智大学社会福祉学科での学びを経てソロ和太鼓奏者として、表現の道を歩む（語り手名：筆者編集）が、縁、言葉、音、それぞれの力、「三力」（みりょく）の中で進んできた道のりと、一年間のアメリカ留学をはじめ、今後のチャレンジに向けた思いを語ります。
生活保護受給者	「ホープレス」が「ホームレス」になるんです	現在、生活保護を受けながら就職活動をしている47歳です。仕事がなくなり、住む所がなくなっても人はすぐには「ホームレス」にはなりません。親、兄弟、友人など親しい人との絆がなくなり、希望がなくなり、「ホープレス」となり「ホームレス」となるのです。
セクシャルマイノリティ	知ってますか、性的マイノリティの暮らし方	性的マイノリティというのは実は後付けの分類。当人は自分が人と違うなんて自覚がなく、人に言われて初めて「えっ!?!」てことも。それにたとえ若いころ自覚したとしても、いつまでも若くない。パートナーとの出会い方は？ 関係って続かないの？ 一番困るのはどんなとき？ など、大人になってから遭遇するライフイベントについて語ります。

(駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室、2011: 資料11)

こうした本の成り手を学生たち自らで探し、交渉し、信頼関係を持った上で、ヒューマンライブラリーの趣旨を理解してもらい、「生きている図書館」は開催されていくという流れで行われた。

1-2-2 「生きている図書館」活動の成果

駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室（2011）、また、坪井氏への聞き取り調査の中から得ることができた「生きている図書館」活動の成果は次のようなものである（駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室、2011：49-61）。

まず、「読者」となった一般来場者であるが、「すごく面白かった」「いい話を聞かせてもらった」というような、概ね好意的な評価を得られている。中でも、「私や世間では知られていない現状や活動があることを知り、私たちにはまず『知る』『耳を傾ける』ということが大事なんだなと思いました」「マイノリティの方は思ったよりも“普通”で身近な存在だと思った」というように、「読者」となった参加者が、「本」と出会うことによってこれまでの自分の世界観や見方・考え方とは異なる気づきを得られたという感想が得られている。

次に、「本」となった協力者の語り手である。「本」協力者はヒューマンライブラリーでは話題の提供者の役割を果たすが、それだけではなく、「関心を持って聞いてくれた読者の人との触れ合い」「本として一般の方とそのジャンルの中に共通認識が生まれた（と思える）こと。一般の方の考えも気軽に聞けたこと（普段は尋ねられないか、機会自体がないですから）」という、語り手自身が、自身の持つ特徴を持たない他者である「読者」や、開催したゼミ生たちとの出会いを肯定的に認めようとしている点を窺うことができる。また、「真剣に聞いてくださる読者がいた事で、自分の気持ちや思いなどを、自分自身でも強く再認識でき、『過去を振り返る&これからがんばる』心が高まった」というように、語り手の自己肯定感・効力感の向上にも効果があったことが「本」協力者自身の気づきとして記録されている。この点は、聞き取り調査において坪井氏が印象に残った点としても挙げられており、注目できる点である。

最後に、開催する立場のゼミ生である「司書」の視点である。この点が教員養成としての「自発的活動」のあり方を探る筆者らにとっては重要な箇所である。駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室（2011）や坪井氏への聞き取り調査から得られた、ゼミ生たちにとっての成果は次のような点であったといえる。

第1は、「生きている図書館」を開催することによって得られた、自分自身のマイノリティや、あるいは外側に広がる社会に対する「視座」の変化であろう。ヒューマンライブラリーで「本」協力者が背負う背景について知り、マイノリティに対する見方が変化するのは、「読者」だけではない。主催するにあたって、限られた閲覧時間の中で、「本」協力者にどのような語りをしてもらうか、それを決定するためには、「司書」自身が語り手と接し、語り手の内容やその背景を理解していかなければならないからである。そのため、「司書」は「読者」以上に「本」の内容に熟知していかなければならない。

第2は、「本」の成り手を探し、協力を得る作業によって得られた「異なる他者とのラポール関係の構築力」である。これは第1の点とも重なる部分がある。主催者はまず、「本」協力者を探さなければならない。そのためには、ヒューマンライブラリーの趣旨を理解してもらう必要がある。しかし、たとえ趣旨を伝えたとしても、この活動は「本」協力者が普段マイノリティとして葛藤を抱える自己の世界観を、見知らぬ他者に語るというものであり、相当の緊張やそれを乗り越える勇気が伴う。それをなすためには、主催者は活動の趣旨を伝えるのみならず、協力者とラポール（信頼関係）をつくり上げ、自己を開示することが容易にできる関係づくりが、まずもって必要となる。この関係無くして、「本」の成り手を見つけることはほぼ不可能である。坪井ゼミの学生たちが最も時間を要したのも、この点であったようである。

第3は、「生きている図書館」を開催することで得られた「集団で計画・実行するための協働力」である。20種類に近い「本」協力者を集め、地域に広報を行い、経費を集めるために寄付を募り、当日は「本」の閲覧を管理する、報告書をまとめる——といった作業は、集団で取り組まなければ実行不可能なものである。計画、交渉、分担、実行、内省という一連の過程をそれぞれが把握しつつ役割をもって実行していく中で、実行にあたって必要不可欠な協働力が形成されていくのだといえる。

このように、駒澤大学坪井ゼミで行われた「生きている図書館」活動は、生きにくさを抱える「本」と「読者」の対話を実現し、「読者」が日ごろ気づきにくいマイノリティの視点に気づく場を提供する。それはまた「本」にとっても自己を見つめ直すきっかけを与える。されど「本」が「読者」によって傷ついてしまわないように、「司書」が責任をもって開催する。そのためにも、「司書」は事前の「本」との信頼関係

の構築が不可欠であり、その関係無くして交渉も実行も成立はしない、という構造を持っているのだといえる。

2. 山口大学における示唆と課題

2-1 示唆

駒澤大学坪井ゼミの「生きている図書館」に代表されるようなこのようなヒューマンライブラリーの活動は、山口大学教育学部の教員養成における学生の「自発的活動」の展開の可能性を考えてみたい。

冒頭でも述べたように、現在の「自発的活動」は、その効果や意義は十分に理解できるものの、「学校」における「子ども」というものに焦点が置かれているため、学生の社会への視野を広げていくためには不十分な点があった。これまでの「自発的活動」に加える形で次のような意味を持つと考えられる。

第1に、これまでの「学校」における「子ども」を中心としていた活動に対し、この活動は広く「社会」における「人間」を焦点におくものであるという点である。ヒューマンライブラリーは、これまでの活動のように直接的に学校教育へ資することはない。しかし、この社会に存在する多様なカテゴリーを持つ人間と接することで、多様な人間の成長像やそこに至る過程に触れることができる。ともすると「子ども」の時代のみで人間の成長を捉えがちな学生たちにとって、人間成長を幅広い視座から捉え直す契機になるといえる。この「社会」における「人間」という広い視点を軸にすることで、以下の第2・第3の示唆を得ることができる。

第2の示唆として得られるのは、学生たちが多様な人間像を描くことができるという点である。近年も学校教育の世界で子どもたちの多様性の問題は少しずつクローズアップされてきている。しかし、その多様性はLDやADHDといったいわば認知的なマイノリティの問題に焦点化されて語られることが多く、それ以外の文化的・言語的・社会的な構図で発生するマイノリティの問題はほとんど看過されている状態である。こうした文脈では、教職を志す学生たちが子どもたちの多様性を考える際も、いきおい認知的マイノリティに対する特別支援教育の文脈でのみ子どもたちの多様性を理解しがちである。しかし、こうした多様性の理解をなくして、例えば教室の中の文化的・言語的・社会的構図で発生するいじめの問題や、外国人児童生徒の問題、あるいは子どもたちの保護者の抱える問題に向きあうことは難しい。ヒューマンライブラリーは様々にカテゴライズされる人間に接することを通して、多様な人間の存在やその背景を知り、またそうした人々と関係をつくっていく。それは学生たちに対して、学校の場の中に本来あった、自分たちが看過していた多様な人間像の存在への気づきを与えられる。それは、多様性が求められるこれからの学校教育へ参加するために欠かせない視点となろう。

そして第3の示唆として挙げられるのは、本活動で学生が対峙する関係は、「学校」「子ども」の場の文脈で往々に陥りがちな「支援する／される」権力関係ではなく、あくまで対等な関係として成立している点である。「本」協力者に対して学生は自己を開示し、自分自身の社会に対する見方や人間に対する偏見の変化を感じながらでなければ、信頼関係を構築することはできない。この対等な関係があるからこそ、学生は見知らぬ他者と「協働」を余儀なくされるし、だからこそ自己の社会や他者を見つめる視点を振り返り、より幅広い世界観、コミュニケーションや計画遂行のスキル、を得ることに繋がるのだといえる。

これらは、現在の「自発的活動」が抱えるジレンマの克服にとって非常に示唆的な点である。

2-2 課題

一方で課題も散見される。これまで見てきたヒューマンライブラリーの活動は概ね大都市が中心であった。本稿で取り上げた駒澤大学だけではなく、同時期には獨協大学・明治大学でも行われている。また、京都でも開かれている。しかし、本学は山口という、全国的に見れば小規模の地方都市である。こうした場所でヒューマンライブラリーを開催するのであれば、大都市部では見られない、小規模地方都市ならではの実情を考慮した計画を行っていく必要がある。

まずあげられるのは、「本」協力者をどのようにして見つけるか、ということである。聞き取り調査に赴いた際に坪井氏は「『本』として話すことは問題ないけれど、自分の居住地域ではできない、職場の人が来そうな場所ではやりづらい」という協力者たちの声があったことを述べていた。大都市であれば、そういうことの可能性は低減されるが、地方都市であればあるほど生活圏は狭くなり、こうした問題が立ちはだかつ

てくることは想像に難くない。また、都市部に比べてそうした多様性についての寛容性が地方において醸成されているとも言いがたい。こうした都市部よりも地方が抱える状況から、その中で「本」協力者が自己の抱える葛藤やその解決のありようを開示するのは至難の業である。

こうしたことを考慮した上でヒューマンライブラリーは実行される必要があるだろう。例えば、「読者」を一般に解放するのではなく、まずは学生たちの間で行うといったようなクローズドな関係で実施することも方策の一つである。

いずれにしても、場の環境・状況を考慮し、適切な枠組みを考えながらでなければ、ヒューマンライブラリーの実施は難しい。しかし、この活動が潜在的に有しているものは大きい。「すべての教育は異文化間の教育である」という認識に立ってみれば、異なる文化たる他者を理解し、その他者と協働の関係を構築し、あらたな社会をつくりだしていく力は、教員養成の初期段階である学部学生にとって今まさに必要な能力であるといえる。そうした力の醸成を、この活動は可能性として秘めているからこそ、今後状況を踏まえた具体的活動提案へと移行していく意義がある。

参考文献

- 工藤和宏（2011）「『他者』との半構造的対話を通じた偏見低減の可能性—『ヒューマンライブラリー』の実践報告—」「偏見の形成メカニズムと低減のための教育—誰一人切り捨てられない社会の構築に向けて—」異文化間教育学会第32 回年次大会論文抄。
- 駒澤大学文学部社会学科坪井健研究室（2011）『リビングライブラリーの可能性を探る—実践報告：第1回「生きている図書館」駒澤大学2010—』<http://tsuboi.secret.jp/livinglibrary/main.pdf>（2012/1/6閲覧）
- 獨協大学外国語学部英語学科工藤和宏ゼミ（2011）『獨協大学リビングライブラリー—日頃気付かない自分に気付こう—』http://www2.dokkyo.ac.jp/~esemi044/report/2011_DLL_report1.pdf（2012/1/6閲覧）